

授業改善 5つの視点

「学びのときめき」のある授業になっていますか？

1 課題設定

少し困難な課題を取り入れ、「挑戦」する態度を育てていますか。

子どもがある目標を実現したいと思い、その目標の実現のために多少の困難さが伴うとき、その事象は子どもにとっての課題となります。

「すぐには分からない。でも、粘って取り組みば何とかできるかも。」と子どもが思うような課題も授業の中に取り入れ、「挑戦」する態度を育てましょう。

拓也さんが作った表の1回目の調査で、落とし物の合計のうち、文房具の占める割合を求める式を答えなさい。

拓也さんが作った表

	1回目	2回目
文房具	201	212
ハンカチ・タオル	49	28
その他	55	50
落とし物の合計	305	290
落とし物の合計の平均値 (1学級あたりの落とし物の個数)	20.3	19.3

平成 27 年度全国学力・学習状況調査 中学校 数学B Ⅱ

この問題を解くのに必要な情報はどれかな？



2 見通し

「方法」に加えて、「結果」も予想させていますか。

「どうしたらよいか」という方法の見通しに加えて、「どうなるのだろうか」と、結果の見通しをもたせることで、自分の予測や仮説等が正しいのかどうか「分からないから学習しよう」という学習意欲につながられます。

「授業展開を予め理解すること」だけでは、「授業」は「作業」になってしまいかねません。

どうなるでしょう。
どうしたらよいでしょう。

ドキドキ
ぼくは、こうなると思うよ。
でも、あっているのかなあ…。



3 言語活動

相手意識をもたせて、発言させていますか。

授業で「交流」を仕組む目的は、自分や相手の考えを広げたり深めたりすることです。お互いに意見を「表明し合う」だけでは意味がありません。

どのような理由や根拠をどのような順番で話せば自分の考えが相手に伝わり、理解してもらえるか、という相手意識をもって、発言させることが必要です。

ぼくは…。

ぼくの意見は〇〇です。

わたしの意見は〇〇です。

順番に発表してその後、シーン…。これって「交流」？

わたしは…。



4 振り返り

その授業で自分が何を学び、どう変わったかを実感させていますか。

振り返りでは、学習内容を「まとめ」として振り返るだけでなく、自分が何を学び、どのような変容があったのかを実感できるような工夫が大切です。このような振り返りができると、学んだことを次に生かそうとする、学習意欲もはぐくまれます。

まとめ

学んだことの定着のために重要

受粉したホウセンカの花粉は数分で花粉管を伸ばし始め、時間の経過とともに花粉管が伸びていく。

感想

学習意欲をはぐくむために重要

花粉から管が伸びるなんて予想外で驚いた。細胞が生き続けていることが実感できた。植物も子孫を残すために懸命に活動している。生命の神秘性を感じられているね。



5 授業全般

その授業で子どもに「身に付けさせたい力」が書けますか。

授業の活動は、子どもに「身に付けさせたい力」を付けるためのものになっていますか。教師が指導しすぎることによって子どもの思考場面を奪ったり、主体性をはぐくむという名目で放任しすぎたりする授業にならないよう、十分注意する必要があります。

めあて(課題)・・・

この過程は「身に付けさせたい力」に対応していますか？

まとめ・・・

たとえば、「力」を教師用の授業案に付箋で貼れますか？

学習意欲にかかわる質問紙調査の結果から

平成 27 年度全国学力・学習状況調査報告書(平成 27 年 10 月香川県教育センター)コラム欄から引用

Column

無解答率が全国を上回る設問の割合

【中学校】	該当設問数	県が国を上回る設問数	割合
全設問	118	94	79.7%
全国の正答率が50%以下	33	12	36.4%
全国の正答率が80%以上	26	26	100.0%
全国の無解答率が5%以上	39	15	38.5%
全国の無解答率が1%未満	49	49	100.0%
選択式	68	68	100.0%
短答式	35	22	62.9%
記述式	15	4	26.7%
正答率が全国を下回る設問	67	61	91.0%
終末の設問 (A問題5問、B問題3問)	21	15	71.4%

香川県の平均無解答率が全国平均を上回る設問の割合から分析すると、難解な設問や記述式の設問が多く上回っているのではなく、全国での正答率が高い設問や無解答率が低い設問、選択式の設問に多いことが分かります。

なぜ、誤答や無解答になったのか、一人一人の児童生徒の実態を踏まえて、把握するようにしましょう。また、校内で共有し、指導に生かしていきましょう。



【報告書 P15 より】

Column

「〇〇の勉強が好き」と言える香川の子どもに

「〇〇の勉強が好きですか」に対して肯定的に回答している児童生徒の割合が毎年全国平均を下回っていることは、経年の課題とされています。

子どもたちが「〇〇の勉強が好き」と言えるために、例えば、国語では、本を読み込んで作者とかかわる、考えたことを表現して他者とかかわるなど、国語本来の楽しさを味わわせるとともに、授業でも楽しいと感じさせることが重要です。

そして、授業改善のためにまずは、「①教師が子どもに付けたい力を明確にする」とともに、「②育てたい子どもの姿を具体的に想定して授業に取り組んでいく」ことが必要です。そして何より、子どもたちに想定した力が少しでも付いたときには、「③教師が見逃さずしっかりと認めましょう」。子どもたちが「できるようになった」と自覚し、「〇〇の勉強が好き」と自信をもって言えるように授業改善に取り組みましょう。



【報告書 P29 より】